布を創る ⑭

縦糸と横糸でつくるニット機械を 使って微妙な地風を表現

松 尾 武 幸

ニットと織物の違いは、普通、ニットは一本の糸で編む、織物は縦糸と横糸で織るという理解で間違いではないと思うが、編み機の中には、縦糸を織物のように整経して、そこに横糸を編み込んでゆく機械もある。ニットと織の中間形態の機械ということになるのか。

こういう機械を使いこなしているニッターは、日本全国でもあまり数が多いわけではない。イタリアの有名なデザイナー、ミッソーニが創っている多彩な色によるヘリンボーン表現などは、そうした縦糸と横糸でつくるニット機械を使ったテキスタイルである。

日本でも、このミッソーニが使っている編み機を使って、ユニークでおもしろい生地を創っているニッターがあるという話を聞いて取材に出かけた。

八王子の中山メリヤス(社長中山克郎氏)である。中山メリヤスは、普通のラッセル機械も使っているが、このミッソーニが使っている、編み機でありながら、織の感覚の表現できる独特の機械も使いこなしている。

機械は二種類ある。

一つは、イタリア製のワルテックス(A・カペルドーニ社製)であり、もう一つは、日本製のワーベット(国広社製)である。

中山メリヤスは、ワルテックスを4台、ワーベットを3台持っている。

ワルテックスは、ミッソーニが使っている機械で、縦糸をパイプの中を通して、そこに横糸を編み込む縦編機であり、ワーベットは、縦糸を織物を作る時と同様に整経して、そこに横糸を編み込んでゆく横編み機である。

いずれも編み機であることで、単なる織機ではできな

中山メリヤスのワーベット機

い柄の表現ができることと、生地に適度な伸縮性を持たせることができることが特徴である。

織物に近いニット製品だが、丸編みによるジャージ生地とは違う。縦編みという機械はどこにもあるが、この機械は、整経工程をもつて手づくり作業部分がある。能率は自動的に編み立てられてゆく編み機よりは悪いが、できあがった地風、風合いは独特のものになる。手作りの縦編みといえるかも知れない。

「この機械は、“よこやさん”、つまりニットを扱って

Textile Creation

著者紹介 TAKEYUKI MATSUO

Fashion Business Institute

ファッション・ビジネス総合研究所 代表取締役

著者は、アパレルを中心としたファッション・ビジネスの研究をご専門とされ、著書に「アパレル産業ハンドブック」(東洋経済新報社、1996、共著)、「よく分かるアパレル業界・日本実業出版社、1992、共著」他がある。

本稿では、「産業の空洞化」に抗して、日本のクリエイターたちの“布を創る”努力と業績を紹介していただいた。

いるところでしかできない」と中山さん。

こう書いていると、中山さんの布づくりは機械のユニークさにだけ寄りかかっていると思う読者が出てくるかも知れない。だが、中山さんの布創りの思いの深さは、この後にある。

中山さんがイタリアに出かけて、ワルテックスの編み機を買ったのは、15年前に、当時取引のあったワールドのイタリア・視察ツアーの一員として、現地でミッソーニの多彩な色とユニークな柄、地風の表現に共感して、その編み機を探したからである。

この後で、国産のワーベットも揃えている。

当然、当時の中山さんのニットの表現は、ミッソーニに強く影響されたに違いない。

しかし、流行は移り変わる。いま、ミッソーニ的な多彩な色表現は、トレンドではない。とくに若い世代ではもう、それは過去のものになっている。むしろ若い世代に“渋さ”を求める流れが広がっている。

このマーケットの変化にどう対応するかが、現実の商売の上では極めて大事になってくる。

今度の取材でわかったことは、今、中山さんが創っている布地は、全くミッソーニ的ではないということだった。

もともと、ワルテックスは、格子柄の表現が得意で、この機械で編むと、地の薄い格子柄の表現がきれいにできる特徴があるのだが、中山さんは、今は、その柄表現ではなく、限りなく無地に近い感覚の生地づくりに集中している。縦糸にループヤーン、横糸にウールのS撚り、あるいはZ撚り糸を使うことで、これまでになかった無地をつくる。それは単なる無地ではない、適度の伸縮性を持ち、地風は織ものにはない表現である。

この微妙な生地の地風、風合いをコトバであらわすのは、容易ではないが、糸使いの工夫とこの編み機のユニークさをからみあわせて、シャリ味があつて、伸縮性のある無地を作っているし、また、S撚りとZ撚りの糸を生地の左右に計算して使い分けて、その生地をパンツに使うと左右の腿に対して適度にしめる力が働いてくれる生地など様々な工夫をこらした生地を創っている。

それは、もう独特の世界である。

「デザイナーの人に“これ面白いね”と言われるのが一番嬉しい」と中山さん。

見た目には無地でも、触ってみると、今までの生地に

はない触感、適度の伸縮性、いわゆるテクスチャーとしての素材感のユニークさが特徴なのである。

今、時代のトレンドは、生地の上ののせる色柄の表現の手前にある素材そのもの、後染めものならそのP下生地そのものの面白さが問われる時期に入っている、中山さんは、いま、縦糸と横糸を使うニット機という、世界でもあまり数多く出回ってはいない機械を使って“布を創る”チャレンジをしている。

「こうした仕事をしていて、改めて思うことは、自分一人だけではできない」「チームワークの大切さだ」という。もつと、具体的にいうと、特別に注文するS撚り・Z撚りの糸もそれを撚る業者がいなければできない。八王子の撚糸業者の数も隆盛期に比べると随分減ってしまった。しかし、中山さんもその一員である八王子ファッション協議会の仲間の中に、撚糸一筋の業者がいて、中山さんの布づくりに協力している。この八王子ファッション協議会は、面白い組織で、ファッション創造の好きな人、企業なら誰でも入れる。板締め染めの得意な奥田染工も会員で、中山さんの創った生地に、発泡スチロールを染め板に使ったプリント加工をしている。本連載の第2回に登場したドビー織の宮本さんもこの協議会のメンバーである。

また、中山さんには、“ふくろ編み”という独特の編み組織の開発の仕事もあり、ここでは、ニットの研究で結ばれた福井の20年来の友人ニッターがいる。また、宮崎には全国野蚕学会が、十年前に長野・穂高で開かれた時以来の知己である秋山真和さんがいる。秋山さんは、和服の世界では、貝紫の復元に成功した人として有名で、自身の工場には藍染めの甕を十何台も備えている染織研究家だが、中山さんはシルクの染め下生地を提供、ユニークなスカーフができ上がっている。

悩みは、年々生地のユーザーであるアパレル・メーカーの中に、こうした生地の良さ、生地づくりの苦心をよく理解してくれる人が減ってきたこと。また、生産の面では、完全自動ではなく、縦糸の整経は、ハンドを伴うなど作業面の厳しさが若い世代にあまり喜ばれず、新規採用が難しいこと。「しかし、そういう商売上の悩みも、工場に入って、布づくりを始めれば、心が落ち着く。平静な気分になる」と中山氏は静かに語った。

(中山メリヤス株式会社＝東京都八王子市天神町12、電話：0426-26-6226、FAX：0426-26-6227)